

2013 年過去問解説

問題 1

解答：e

a)は後頭骨、b), d)は眼窩、副鼻腔、c)は頬骨弓の観察に優れる。

e)は上下顎骨や歯列全体の観察に優れ、下顎骨の骨折の診断に有用である。パノラマ撮影ともいう。

参考文献：田嶋定夫：顔面骨骨折の治療 改訂第2版：18-27，克誠堂出版，東京，1999.

問題 2

解答：c

側頭骨下稜と蝶形骨翼状突起を起始として、下顎骨関節頭に停止しているため、関節突起の骨折では、この筋肉の作用により関節突起が内方に転移する。

文献：

参考文献：田嶋定夫：顔面骨骨折の治療 改訂第2版：182，克誠堂出版，東京，1999.

問題 3

解答：d

Le Fort III 型骨折は、顔面骨が頭蓋底と分離する骨折形式であり、上顎骨は一体に保たれる。

参考文献：田嶋定夫：顔面骨骨折の治療 改訂第2版：197-232，克誠堂出版，東京，1999.

問題 4

解答：b

a) 前歯部に好発。c) 通常、Le Fort 型骨折など、他の骨折に合併して発生する。

d) 画像上転位が明らかでないが、咬合異常を呈する場合は、顎間固定の適応となる。e) 骨折の整復は、緊急を要さない。

参考文献：田嶋定夫：顔面骨骨折の治療 改訂第2版：197-232，克誠堂出版，東京，1999.

問題 5

解答：a

解剖書を参照

問題 6

解答：c

外眼筋の絞扼を伴う線状骨折は小児に好発し、絞扼された外眼筋が不可逆的な損傷を受け、永続的な眼球運動障害を残す危険性があるため、速やかに整復する必要がある。

参考文献：Grant JH III et al. Trapdoor fracture of the orbit in a pediatric population. Plast Reconstr Surg 109:482, 2002.

問題 7

解答：a

Angle class I は上顎第一大臼歯の近心頬側咬頭が、下顎第一大臼歯の頬面溝に接触して咬合する正常咬合であり、class II は上顎前突もしくは下顎後退の咬合であり、class III は下顎前突もしくは上顎後退の咬合である。Class IV は存在しない。

参考文献：赤松 正：maxillofacial surgery に必要な咬合に関する知識。PEPARS156：1-7, 2019.

問題 8

解答：e

a) 腸骨ではおもに内板から採取する, b) 肋骨の側方への突出変形は起こらない, c) 外側大腿皮神経の損傷に注意する, d) 耳介軟骨を採取する場合はおもに耳甲介部分から採取する

参考文献：小澤重雄, 勝沼孝臣, 渡辺敏夫, 他：下顎オトガイ正中部骨採取部位の骨再生: コーンビーム CT による評価. 日口腔インプラント誌 29:46-54, 2016.

問題 9

解答：e

Le Fort I osteotomy は上顎骨骨切り術の術式である。

参考文献：小室裕造：7 頭蓋骨縫合早期癒合症 1) 病因, 分類および治療指針. 形成外科ADVANCEシリーズ I-5 頭蓋顎顔面外科 最近の進歩：59-66, 克誠堂出版, 東京, 2008.

問題 10

解答：c

a. 側頭筋移行術、b. 遊離広背筋移植術、d. 顔面交差神経移植術、e. Kuhnt-Szymanowski 法は顔面神経麻痺に対する再建術式としてあるが、c. Tennison-Randall 法は唇裂に対する術式である。

参考文献：TEXT 形成外科学第 3 版 p288-289

TEXT 形成外科学第 3 版 p186